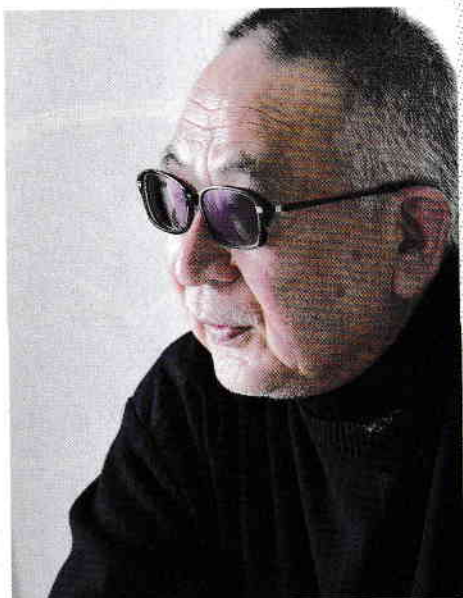


小泉堯史 映画『峠 最後のサムライ』を監督



1944年、水戸市生まれ。黒澤明監督の助監督を長く務め、2000年、デビュー作の『雨あがる』でベネチア国際映画祭緑の獅子賞を受賞。『阿弥陀堂だより』『博士の愛した数式』など現代ものの作品でも高い評価を得ている。

観た人の心に美しい
生き様を残したい

腕は立つのに人のよさから仕官を逃す『雨あがる』の三沢伊兵衛。理不尽な死を淡々と受け入れ藩に誠を説く『蝸ノ記』の戸田秋谷。そして、来年6月公開の『峠 最後のサムライ』では、幕末に賊軍の将として義に殉じた越後長岡藩の家老、河井継之助――。小泉堯史監督が描く侍はみな、不条理な運命のただなか
にありながら揺らぎない志を

静かな眼差しに湛えている。

黒澤明監督のもと初めて助監督を務めた『影武者』から40年余。「一度、侍というものをきちんと掴み取ってみたい」という年来の思いがあったところ、司馬遼太郎の『峠』を読み返すと、著者の記したあとがきが目を引いた。「『人がどう行動すれば美しいか』を考えるのが武士道であり、『どう思考し、行動す

れば公益のためになるか』を考えるのが儒学であろう。そして、この二つが結晶した人間の芸術品ともいえる幕末人の典型が河井継之助だとありました」

司馬がこうまで絶賛する人物と「会いたい」と思った。「黒澤さんはよく『美しい映画』を創りなさいと言っていた。僕も河井継之助という美しい人物に惹かれ、彼のことをもっと知りたいという気持ちで企画化しました」

大学卒業後、縁があつて黒澤プロの一員になるが、すぐに仕事があるわけではない。アルバイトやほかの監督のもとで働いて食いつなぎ、多少の余裕ができるとカメラを片手にアジアを歩き回った。

ようよう映画の仕事一本に絞れたのは前述の『影武者』からで、以降はすべての黒澤作品に脚本から加わった。

自ら脚本を書き、最初にラストシーンを思い描くのも黒澤流だ。小説『峠』では重傷

を負って死を覚悟した河井が下僕の松蔵に命じて庭先に火を焚かせ、病床からその火を見つめながら死んでいく。

大義の前に我欲を溶かし、自分の生と死すら静かに突き放す河井の生き様と、若い頃にヒンズー教の聖地バラナシで目にした茶毘に消える遺骸の姿が重なった。「ここを映画としてとらえたかった」と小泉監督は打ち明ける。

人間の営みは普遍的の美が付与される限りには、世界の移り変わりに耐えられる。逆に言えば、個を凌駕する戦禍や災害を乗り越える力は、そこに求めるしかないのである。「僕にとって興行的に受ける、受けないは別の話です。観た人の心に河井の生き様が残り、ふとしたときに思い出される。そういう映画になっていたらと思います」

不安と分断が滲み人間としての品格を失いそうになる今、私たちは「最後のサムライ」に何を見るのだろうか。P

『きれいにやせる食材&食方図鑑』

岸村康代 著

大事な栄養素を調理の過程で失っていることが実は多い、知って得する61の食材と、その調理法を紹介する。



『すぐよくわかる 絵解き広報』

山見博康 著

「リモート時代の広報の基本とニュー・スリリース作成メディア・危機対応まで」がサブタイトル。多数の図版を用いた実践版。



『夫を変える！魔法の言い方』

佐藤律子 著

新型コロナウイルスの影響で増えた、自宅過ごす夫婦の時間。夫婦「コミュニケーション」が劇的に良くなる一冊。



> 新刊紹介